

れたのが青蛇という毒蛇と毒のあるサソリでした。

海口市に着いた我々は相も変わらず前記にも申し上げた兵站部の設営任務で海口市街の所々に各廠を設け、分かれて各廠の任務に付く。糧秣廠は海口市海岸に近い元瓊山大学に設立される。広場を占拠しその処に天幕にて覆い、山積みされた糧秣の配給任務に従事することとなり、宿舎は近く海口市竹林村という地所で、駐留することとなりました。

バイアス湾敵前上陸から広東攻略と題した記事も海南島の敵前上陸までのびてしまいました。

揚子江遡行

静岡県 鈴木 武

昭和十二年、日本と中国の関係はいよいよ悪化し、七月からはつぎつぎと召集令状が下され、磯辺の静かだった村も鼎の沸く以上に沸き返った。親しかった友達も何人も召されて出征して行った。未教育補充兵で

ある自分にも召集が来て、当然とは覚悟していたものの、十月十二日実際に赤紙を手にした時の心境は実に何ともいい難いものだった。日本男子として、お国のために働く時が来たと奮い立つ気持ちとが入り混じって、胸を突き上げて来た。

何年も苦勞して、ようやく始めた自分の仕事も九月やっただけで整理しなければならぬ。昼間はその仕事の片付けに駆け廻り、夜は夜中までかけて親戚や親しくしてもらった知人、友人のところに、もう再び逢うことのないかもしれぬ別れの挨拶に廻って、十七日に三島野戦重砲兵第三連隊に入隊した。配属された部隊は第二水上輸卒隊古田隊だった。

予防注射等をすませ、行先等もちらん不明のまま列車に乗り込む。それでも三島駅の見送りの人の数は何千というほどだった。発車直前、窓の内と外とで女の人と泣いて別れをおしんでいる人も何人かあった。その中には小さな子供を背負っている人もあった。自分にはこのような見送りはなかったが、家には年老いた祖母と中風気味の父、病弱な母と小学生の弟を残して

ある。私が戦死したら家族はどうして生きて行くだろうと考えると、その人達の気持も十分に察しられ、胸は熱く固く締めつけられる思いだった。

駅ごとに白樺の国防婦人会の日の丸の小旗に送られ、広島より御用船に乗る。薄暗くなった時、船は関門海峡に入る。大部分の者がデッキに出て、もうこれで眺めることもできぬであろう祖国の風景に最後のサヨナラを心の中で叫んでいた。その心の中は鼻すすりとなって各所に聞かれた。

一旦、佐世保に上陸した、わが部隊は、敵前上陸用資材の搭載作業をやり、積み終わると同時に荒れ狂う玄海の波を潜って上海に向かった。しかし船は上海沖まで行けず、呉泓沖に碇をおろしてしまった。しばらくの間はデッキに出て変らぬ風景を眺めるのみだったが、半月ぐらいしてようやく上海魚市場に上陸する。対岸の敵陣地からは砲弾がいくつも飛んできていた。

畑中部隊に隷属してまたまた乗船し、揚子江を上がって浒浦鎮敵前上陸に参加する。沖合に集結した二十隻ぐらいの軍船中の先発部隊中の先発分隊として、降

りしきる雨の中を上陸する。道路は泥水の川となり、腰まで浸る。方角も何も判らない。ただ弾の音のする方角に進む。

上海より陸路を進んできた友軍と、それを向かえ撃つ敵の砲弾、銃弾は頭上を交叉して飛び交ってその音たるや豆を炒るという言葉などではいい表せるものでもなかった。敵を撃退したものの雨の暗闇、自分の本隊を探すのに大苦勞した。

十一月二十三日、常熟に入り、鈴木部隊に隷属されてようやく本国からの小型船艇が届いて、本来の任務である兵員弾薬等の輸送の任に当る。その後何回もの弾丸の洗礼によって、音で弾の遠近強弱も判るようになった。

敵地での生活にも馴れて心に幾分かの余裕も生じ、暇ある時など故郷に残した家族のことが思い起こされた。苦勞している姿が無性に懐かしくなるけれども、遠く離れた地にて如何ともなしたがたく、ただただ東の空に向かって氏神様に無事であれかしとお祈りしてやる以外に無かった。

その後、江蔭に移動し、神子田部隊に配属され、鎮江、星子、蕪春と進攻して十三年十月武昌に入った。

この間、振り返ってよくぞ生きてここまでこれたと思うこともしばしばだった。戦地には戦闘の際の砲弾の危険だけで無く、思いもよらぬ危険がいくらかも潜んでいた。

クリークを輸送中、木橋の下にさしかかった時、その橋を落され、機舟は落ちてくる橋材で通れなくなり、自分は桁木に押しつけられ、だんだん息も出来ぬ状態となった。もう駄目だと思つて意識も薄らいだが、战友の真剣な救護活動のお陰で息を吹き返したこともある。

揚子江を御用船でさかのぼる時、左側の岸より迫撃砲で撃たれ、自分のいた二メートルぐらいの真正面の船腹に命中し物凄い衝撃を受けた。硝煙の静まった後は船腹には、すぼっと穴が開き、自分のいる付近は砲弾と船体の鉄片が一杯に散らばっていた。しかし、奇跡的にも、かすり傷一つ負っていなかった。

鄱陽湖で水浴び中、鼻先に廬山中腹からの砲弾が飛

んできて、自分の体も水に持ち上げられるような感じだったが、これも何とも無く、陸に逃げ衣服を抱えて宿舎に走ったこともあった。

十一月十六日には洞庭湖岸の岳州に上陸し、敵前線と対岸に向い合つた。立哨中を狙撃されたり、砲撃や爆撃をされたり、上流から大きなドラム缶のような機雷を流されたりした。目の前で機雷に当り、舟も乗務員も煙の中に消え、後には破片すら浮いていないことも数えきれなかった。軍艦ですら半分ぐらいがどこかに飛び散つて、残つた半分で浮いていることも何回もあつた。

内地からの便りの配られることに父からの手紙が入つていた。それによると、七十歳を過ぎた祖母は雨でも風でも暑くても寒くても、お前が応召した日から一日も欠かさず氏神様にお参りしてくれているとのことだった。そのお陰だろう。初めの頃、長江の泥水で下痢したことと、マラリヤで二、三回寝たことのほか、元氣であたえられた使命を何とか果たすことが出来た。

昭和十四年秋、呂集團指揮下に入り第一次長沙作戰に参加し、洞庭湖岸鹿角の敵前上陸の兵員輸送を最後の奉公として、翌年春一年二ヵ月生活した岳州より乗船して帰還の途につき、二月に三島の原隊にて召集解除される。

帰宅前に先ず氏神様に無事帰還の報告をなし、二度とは跨ぐこともないだろうと思つた自分の家の敷居を跨いで、家族全員と仏壇にお札の礼拝をした。親戚縁者等と乾杯の時、父も二年四ヵ月ぶりに酒を口にしたといつていた。

この夜の母の敷いて下された布団の温かだったことは五十余年経つた今でも体がはつきりとおぼえていゝる。私の帰りを無性に喜んでくれた祖母は、安心したせいか、力を使い果たしたためか、その翌年の春には自分のやるべき仕事は終わつたというように他界してしまつた。何の孝行も恩返しも出来なかつたことが今も心にかかつてゐる。